

しあわせ

令和 8年 7月 17日(金)
静岡大学教育学部
附属静岡小学校
2年 学年だより 夏休み・8・9月号

その子だからこそその4か月

進級から4か月が経ち、早くも夏休みを迎えます。たったの4か月ですが、どの子もそれぞれに伸びやかな成長を感じさせてくれます。それは、大人が目など一切気にせず、その子が“その子らしさ”をあらわにしながら目の前の「物事」に一心に向かっていった賜物といえるでしょう。そうした「その子だからこそその4か月」に裏打ちされた成長は、日々感じられずとも間違いなく“その子らしさ”を色濃くしていったはずです。

6月半ば、体育の授業を経てサッカーに興味をもったある女の子は、あるとき初めて休みの時間の「サッカー」に参加しました。男の子の中でたった一人の女の子。目まぐるしくボールや子どもが行き交う状況に翻弄されながらも、笑顔でボールを追いかけていました。きっと「初めて『サッカー』をしている」という状況が彼女に高揚感を与えていたのでしょう。対戦するチームの人数を揃えることもしなければ、サイドラインもない独自のルール下で「サッカー」が展開されていきます。そんな中、ボールが「ゴールライン」から出て、男の子たちは当然のようにコーナーキックの立ち位置を取ります。するとその女の子は「ここだけボールが出たことになるの？どうしてここから出た時だけあそこから蹴るの？」と素朴な疑問をこぼしました。ある男の子が数秒ぼかんとした後に「そっか、〇〇ちゃん、（僕たちの「サッカー」を）学んでいるんだね。ここ（足で示しながら）からボールが出たら、コーナーキックって言ってあの角から蹴るんだよ」と声を掛けました。サッカーについての知識などほとんどないその子が、興味の向くまま新しい環境に足を踏み入れ、見よう見まねで「サッカー」をしている“その子らしさ”。附属小で、今のメンバーで楽しむための独自のルールを築いて「サッカー」をしている“その子らしさ”。一般的なサッカーとは言い切れない彼らだからこそその「サッカー」を通して、彼らは何を学んでいるのでしょうか。「角からボールを蹴ると点が入りやすいかもしれない」「サイドラインもあった方が分かりやすいかもしれない」など言葉にできる気付きがあったかもしれませんが、さらに、疑問を受け止めてもらえた安堵感、知っていることを伝えることができた充足感などの言葉にできないものもあったはずです。それらはすべて、子どもに鮮明に刻まれなくとも学びとして“その子らしさ”に還り、豊かにしていくものです。私たちは一人ひとりの“その子らしさ”に目を向けるとともに、それらが目の前の「物事」を介して関わり合うときの素敵な煌めきに魅力を感じてやみません。さらにそうした瞬間の積み重ねによって“その子らしさ”はその子ならではの輝きをもっていくと信じています。それは決してまばゆい輝きではないかもしれませんが、目を凝らさないと見逃してしまうかもしれません。しかし私たちが窺い知れないところでも、子どもは日々多くの学びをしています。「その子だからこそその4か月」に裏打ちされたその子の確かな成長に目を向けながら、これからも支えていきたいと思えます。

大局的にみてしまえば大きな出来事と捉えられずとも、子どもはそれぞれに経験を重ね、その子の『しあわせ』をより確かなものにしていく道中にあります。先にあげた姿ばかりでなく、ときには複雑な思いを抱えて家路についた日もあったかと思えます。いろいろな出来事のある日常であっても、翌日には顔を上げて登校してくる子どもを見ると、学校の“外の世界”で頑張る子どもを温かく支え、送り出してくださっている家庭の力の有難さを強く感じます。夏休みという家庭で長く過ごす期間となりますが、子どもにとって心身のリフレッシュ期間になることはもとより、夏休み明けの学校生活で再度、歩みを進めていくための準備期間にもなっていくことを願っています。今後ともご理解とご協力をお願いします。

